

学校も街も
魅力がいっぱい

特集

岩木健康増進プロジェクト

ビッグデータを活用して 短命県返上を

弘前大学 医学研究科長 中路重之

青森の魅力を高める中核人材の育成を！

「めざせ！ じょっぱり起業家」

弘前大学人文学部 教授 森 樹男

学位記授与式・入学式

平成26年度 弘前大学大学院学位記授与式及び弘前大学学位記授与式

平成27年度 弘前大学大学院入学式及び弘前大学入学式

サークル紹介/結成5年 学生、住民と交流深く

ひろだいはやくみ

弘大囃子組 迫力の響き 各地で

Contents

COVER GIRL/クローズアップ 表紙の顔

P1. 秋山 彩華 さん

理工学部物理科学科 4年

P2. 学位記授与式・入学式

平成26年度 弘前大学大学院学位記授与式及び弘前大学学位記授与式
平成27年度 弘前大学大学院入学式及び弘前大学入学式

P3. 特集1 ビッグデータを活用して短命県返上を

岩木健康増進プロジェクト

弘前大学 医学研究科長 中路重之

P7. 特集2 「めざせ! じょっぱり起業家」

青森の魅力を高める中核人材の育成を!

弘前大学人文学部 教授 森 樹男

サークル紹介/結成5年 学生、住民と交流深く

ひろだいはやしぐみ

P9. 弘大囃子組 迫力の響き 各地で

P10. HIRODAI TOPICS ひろだイトピックス

1. 青森県教育委員会との連携協定
2. 平成26年度弘前大学学術特別賞授与式
3. 黒石市・平川市・藤崎町・大鰐町・田舎館村教育委員会との連携協定締結
4. 「附属図書館ラウンジトーク」で佐藤学長がトーク
5. 楽天野球団社長による特別講演会
「日本一愛される球団を目指して」を開催
6. 深浦町との包括連携協定を締結
7. 作家 高橋克彦氏講演会「北の炎(ほむら)」を開催
8. 平成27年度 弘前大学学生ボランティア活動助成団体採択書交付式を実施
9. 藤崎町との包括連携協定を締結
10. むつ市との包括連携協定を締結
11. 第6回弘前大学出版会賞表彰式を挙行
12. 農学生命科学部創立60周年記念式典を挙行
13. 平成27年度 ヘルシーエイジング・イノベーションフォーラム(東京)開催
14. 弘前大学「教育に関する表彰式」を実施



クローズアップ/ 表紙の顔



今回は
笑顔がまぶしい☆
秋山 彩華さんに
インタビュー
しましたよ



青森県立八戸東高校出身
理工学部物理科学科 4年
秋山 彩華 さん

弘前大学の物理科を選んだ理由は?

もともと物理や化学が好きで、放射光に関心があったのですが、高校生の時に高エネルギー加速器研究機構で研究をさせて頂く機会をもらい、より興味がわき、もっと学びたいと考え物理科学科に進学しました。

弘前のよいところは?

弘前にはよいところがいっぱいです!弘前城では春はさくらまつり、秋は菊と紅葉まつり、冬は雪燈籠まつり。夏にはねぶたまつりや多くの神社の宵宮があり、たえず弘前の魅力を感じて過ごすことができます。

大学生活はいかがですか?

とても楽しいです。自分が興味のある講義を取り学んだり、学科の女の子とランチに行ったり…。私は競技ダンス部に所属しているのですが、部の仲間とは、部活動はもちろん、BBQや観光、キャンプなど学部学年関係なく遊んだりもします。



平成26年度弘前大学大学院学位記授与式 及び弘前大学学位記授与式

平成27年3月24日(火)、平成26年度弘前大学大学院学位記授与式が創立50周年記念会館みちのくホールにおいて、関係者出席の下、厳かに行われ、234人が修了しました。このうち、アテネ五輪アーチエリー男子個人銀メダリストの山本博さんと、テレビ番組の体操のお兄さんとして有名な佐藤弘道さんが、大学院医学研究科(博士課程)を修了し、学位記を受け取りました。

また、平成26年度弘前大学学位記授与式は、第1部(人文学部・教育学部)、第2部(医学部・理工学部・農学生命科学部)にわかれ、弘前市民会館において執り行われました。佐藤学長が各学部の代表者に学位記を手渡し、学長告辞の後、卒業生代表による答辞が述べられ、5学部の卒業生1,294人が、会場の外で待ち構える後輩達に見送られながら、希望を胸に巣立っていきました。



後輩に胴上げされる卒業生



大学院医学研究科(博士課程)を修了した山本博さん



大学院医学研究科(博士課程)を修了した佐藤弘道さん



平成27年度弘前大学大学院 入学式及び弘前大学入学式

平成27年4月7日(火)、平成27年度弘前大学大学院入学式が、創立50周年記念会館みちのくホールにおいて行われました。式では、今年度の大学院入学者に入学許可を行ったあと、佐藤学長による学長告辞に続き、学生を代表して、人文社会科学研究科の田崎杏さんが学生宣誓を行いました。また、弘前大学大学院医学研究科(博士課程)には、長野五輪スピードスケート500メートル金メダリストの、清水宏保さんが入学しました。

続いて、平成27年度弘前大学入学式は第1部(人文学部・教育学部)、第2部(医学部・理工学部・農学生命科学部)にわかれ、弘前市民会館において行われました。式典は、来賓、役員及び部局長等の紹介に始まり、入学許可、佐藤学長による入学式告辞と続き、最後は新入生代表による学生宣誓が行われました。

会場となった弘前市民会館では、入学式の立て看板前で記念撮影する入学生や保護者の姿のほか、サークル・部活動へ勧誘しようと様々な趣向を凝らした学生等で、いつもながらの賑やかな歓迎風景が見られました。



学生宣誓の田崎 杏さん(大学院)



玄関前の記念撮影



大学院医学研究科(博士課程)に入学した清水宏保さん



弘前大学 医学研究科長

中路 重之先生

なかじ しげゆき

特集1

岩木健康増進プロジェクト

ビッグデータを活用して 短命県返上を

短命県ワーストワンといわれる青森県。弘前大学大学院医学研究科長の中路重之先生は、この短命県を返上しようと、2005年から「岩木健康増進プロジェクト」を立ち上げ、11年間にわたって大規模住民合同健診を実施してきました。それが約600項目に及ぶ世界でも例を見ない健康ビッグデータとして蓄積。これにより、2013年に文部科学省から革新的イノベーション創出プログラムであるCOE（センター・オブ・イノベーション）の採択を受けました。弘前大学が国家的プロジェクトとして、全国12の拠点のひとつに選ばれたのです。中路氏は弘前COE拠点のコンセプトに「寿命革命」を掲げ、健康づくりの波を全国、そしてアジアをはじめとした海外にまで広げていこうとしているのです。

世界でも例がない ビッグデータ

青森県は高齢化先進地域であり、永年にわたり短命県日本一でした。その原因の大略は分かるのですが、では実際にどう取り組んでいけば良いのかを考えるために、11年前に岩木健康増進プロジェクトを立ち上げたのです。人口約1万人の全町民を対象に、小学校5年生から大人（最高92才）まで健康調査に取り組みました。

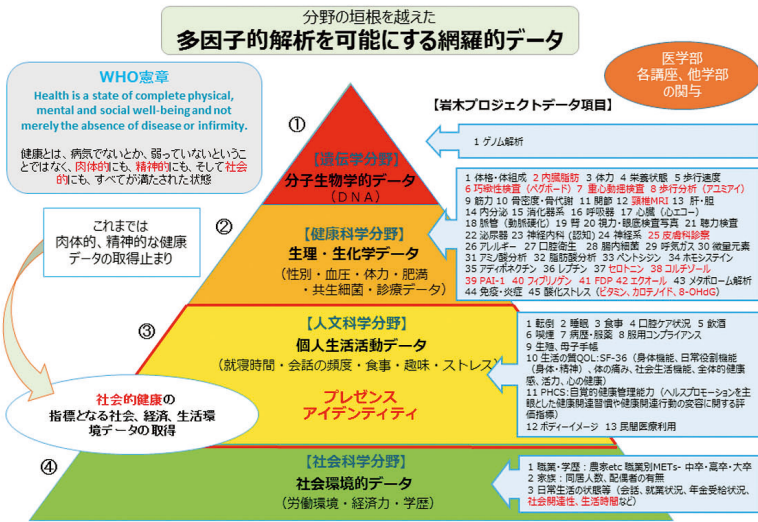
旧岩木町（現弘前市）における私たちの調査とは、住民の大規模な健康調査で、体力測定から動脈硬化、認知症、歯、整形外科、婦人科、骨密度など約600項目にわたっての頭からつま先までカ

バーする多様な検査を実施してきました。遺伝子分析といったゲノム測定などから就寝時間や会話頻度、食事など個人生活活動データなどまでです。

それによって何が分かってきたかと言いますと、例えば体の成長期に運動する子としない子で骨の太さ・強さが中学生で差がつくことが分かりました。子供の頃から屋台骨を強くさせておく必要があるのです。

ロコモティブシンドロームのキーワードは筋肉と骨で、血圧はメタボリックシンドロームのキーワードになります。この2つは小中学校の学校教育の中で、いか

＜岩木PureBigDataの全体像＞



※岩木BigDataでは1人の人間の分子生物学的データから社会環境的データまでをすべて関連つけた網羅的解析が可能

に大切かという教育をしていかないとい
けない。しかも系統立てた教育がこれか
らとても大事になってきます。

約600項目のデータを、11年間にわ
たり取り続けてきたわけですが、この
ビッグデータはおそらく世界でも初めて
のものだと思えます。糖尿病の人の肉と
脂肪の付き方、腸内細菌と認知症の関係
などがこのデータで分かる可能性があり
ます。研究者にとって非常に貴重なビッ
グデータになって、今そこに多くの人が
集まってきているのです。

リーダーが意識を持ってば
世の中は変わる

弘前大学COO拠点としての活動で
すが、目標は短命県返上で、まずは46位
になること。ひとつ上がることは大変な
ことなのです。これには医学部だけでは
限界があるわけですから、他学部、それ
に地域、学校、職域が連携しないとき
ません。

短命県返上のためには、健康について
の知識をしっかりとつけることが必要で、
岩木健康増進プロジェクト
は町長の理解があったこと
からこそ実現できたこと
です。私たちが働きかけた
結果、現在、県内40市町
村のうち、32市町村が健
康宣言を表明するようにな
りました。

このように、まずは市
町村のトップが取り組む
ことから始まり、それぞれ
地域にリーダーを置いて
健康教養を広めていくこ
とが大前提になります。

長野県の例を見ますと、
約200万人の人口に対
して、30万人ほどのリー
ダーを養成しています。長
野県のように健康に関し
てしっかりとした知識を

健康づくりの本
質はプライマリーヘ
ルスケアなので、市

持ったリーダーが意識を変えれば、世の
中は変わります。

トップからリーダーへ。リーダーは人
から人へ伝えていく。その基本が大切な
のです。そのため、県の医師会が本部と
なって「健やか力推進センター」を設置。
そこでは研修や出前授業をし、健康づく
りのリーダー的存在の研修や育成体制
を確立しています。

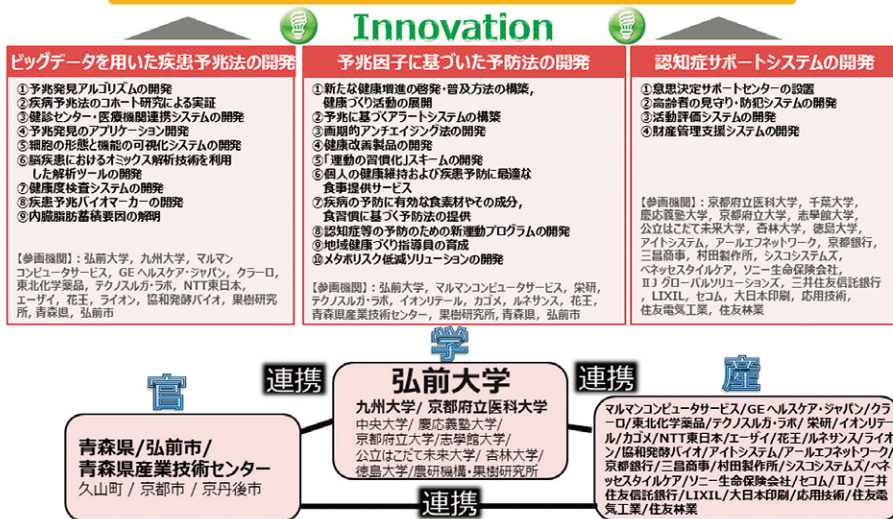
リーダーを育成
する一方で、学校は
健康教育をし、職域
でも健康づくりに取
り組んでいく。会社
の社長さんも健康づ
くりを考えていかな
ければ、会社の発展
がないと思うことが
大事です。健康の知
識を広めていくには
地域、学校、職域の
3つのフィールドが
あって、それぞれが
連携しながら特徴
的なことをやってい
かないといけません
。なかでも大切な
のは学校の教育で
す。

【弘前COI戦略：全体概要】

The Center of Healthy Aging Innovation (CHAIN) ～真の社会イノベーションを実現する「革新的『健やか力』創造拠点」～

将来の社会ニーズ：早期予兆発見による疾患予防法の開発、認知症患者へのサポート

「寿命革命」×「認知症の人と創る未来社会システム」



民の市民による市民のための健康」で、
これは民主主義の原則なのです。そし
て、健康づくりは町を活性化していくこ
とと同じだと言えるのです。

私は弘前大学ほど地域に特化した大
学はないと思っていますから、魅力的な
フィールドとして市町村のためにも、大
いに活用されたいのではないでしょ
うか。

健康づくりは 地域を活性化させる

岩木健康増進プロジェクトで得たビッグデータは、青森にとどまるものではなく、人類的普遍的なものとして発信していかねばなりません。

私たちのプロジェクト戦略では、「革新的な『健やか力』の創造」をテーマに、「寿命革命」をコンセプトに掲げてCOOに取り組んできました。活動内容には、ビッグデータを用いた「疾患予兆法の開発」「予兆因子に基づいた予防法の開発」「認知症サポートシステムの開発」があります。それを活用しながら産、学、官、民が一体となって社会実装に向けてスタートしたのです。



弘前大学 医学研究科長
中路 重之(なかじ しげゆき)

1951年長崎県諫早市生まれ。長崎県立諫早高校、弘前大学医学部卒業。同大学院医学研究科(公衆衛生学)修了。医学部附属病院で内科医を7年間務めた後、医学部衛生学講座の教員(助手)となる。2004年教授。翌年社会医学講座教授。2012年医学部長。専門は公衆衛生学・健康科学で、消化器ガンの発生と生活習慣との関連性や、スポーツ・運動と生体反応の関係の研究などで知られ、東洋大学陸上競技部(駅伝)など多くの団体・アスリートのコンサルティングを行っている。著書に『平均寿命をどう読む?』『Dr.中路の健康医学講座』などがある。

私たちのCOOには、GEヘルスケア・ジャパン、マルマンコンピュータサービス、イオン、花王、ライオン、カゴメ、東北化学薬品など数多くの企業が参画しています。

今、青森県では、かつて秋田県と最下位を争っていた自殺率が下から10番目あたりになったこと、若者の喫煙率が全国平均を下回っていること、わずかずつ健診の受診率が上がってきています。やればできるんです。

健康をテーマにすることで地域が活性化し、「一村一品にもつながっていきます。地域全体が元気になるようにしていくことが、私たち研究者に今求められているのだと思います。県も学校も、医師会も大学も動いています。青森県の中小企業の社長さんたちも健康にもっと興味を持って

いただき、企業も一緒に取り組んでいって欲しいのです。

今すぐに利益は生まれなくても知れませんが、いかに健康づくりに経済活動を乗せていけるかという、世界でも前例が無かったことを、私たちが今まさにやるうとしているのです。それがCOOです。それが日本や世界へつながり、新しい経済的な発展へと展開していくことを望んでいます。

ビッグデータを 活用した取り組み

弘前大学(医学部)COOでは、2014年度から九州大学(医学部)や京都府立医科大学と連携しながら研究を進めているところです。そこでは各大学で持っているデータを相互検証し、地域性を加味しながら全国展開できるよう支援システムの開発に取り組んでいるのです。現在、本学COOはCOO全体におけるコ

ホート連携の中核拠点としての役割も担っているのです。

また、岩木健康増進プロジェクトのビッグデータの解析結果をもとに、開発を進めているひとつに「健康物語」というアプリケーションがあります。これは健康診断の結果で病気の予兆を示す因子から、予防する方法がパソコンやスマートフォンで把握できるようにしたソフトです。

もう少し詳しくいうと、総合健康度をツールに実装し、その結果をもとに個別化した運動プログラムや食事法などの生活改善につなげていけるというものです。健康意識を高めて行動をしてもらえるようにサポートするシステムとなっています。このソフトを広く利用することで、健康教養を身につけ短命県返上に大きく役立ち、ひいては「寿命革命」につながっていくのではと考えています。



ヘルシーエイジング・イノベーションフォーラム(東京開催)
全国各地から約600名参加



岩木健康増進プロジェクト(大規模健診)の様子

産・学が連携することから 新たな可能性が生まれる

弘前大学COI研究推進機構教授 村下公一

世界的価値のあるビッグ データがあったからこそ

日本は現在、超高齢化社会を迎え、「医療費の削減」「高齢者の健康増進」「生活の質の向上」「高齢者の健康寿命延伸」が目下の課題となっています。こうしたことから文部科学省では、平成25年から産学連携による将来あるべき社会の姿、暮らしのあり方の実現に向けた革新的なイノベーションを創出するCOI

事業を開始。

このCOI(革新的イノベーション創出プログラム)に、弘前大学がその拠点の一角を担っているのです。それは中路重之教授チームによる岩木健康増進プロジェクトのビッグデータがあったからで、それを活用して、産・学・官・金が一体となって「疾患予兆法の開発」「予兆因子に基づいた予防法の開発」「認知症サポートシステムの開発」に取り組んでいます。



弘前大学COI研究推進機構 教授・戦略統括
弘前大学研究・イノベーション推進機構 副機構長

村下 公一(むらしたこういち)

青森県庁、SONY(マーケティング部門)、東京大学フェロー等を経て2014年2月より現職。GEとコラボする青森県のライフイノベーション戦略を主導し、多機能小型ドクターカー「ヘルスプロモーションカー」の開発実証やプロテオグリカンをコアとした産業クラスター政策(地域イノベーション戦略プログラム)、医工連携(医療機器開発)支援政策等の企画立案に携わる。現在、弘前大学COI拠点の戦略統括として、産学官のコラボによる青森県の「短命県返上」と、「健やかに老いる」健康長寿社会の実現に向けて邁進中。日本医学会総会をはじめ、HOSPEX、社会イノベーション展、世界健康首都会議、国際モダンホスピタルショーなど医療・健康分野のビッグイベントでの講演多数。

こうしたCOI事業のきっかけをつくり、産・学・官・金が一体となって取り組むような一連の流れを創る中心的な役割を担ってきたのが、村下公一教授です。

「もともと中路教授が岩木健康増進プロジェクトという素晴らしいことをやっていて、そこに数、質、種類において世界的な価値のあるビッグデータがあったことに大きな魅力を感じ、気持ちがあふかされたのです」と村下教授は話します。

現代の病気はひとつのことが原因で起こるのではなく、様々な因子が複雑にからみ合っ引き起こされているといわれています。岩木健康増進プロジェクトの600項目にわたる多因子データは、病気の予知式や新診断法の開発、他コホート研究との連携などで高いポテンシャルを秘めた素材になるのです。

病気の早期予兆と 早期予防に向けて

産・学・官・金が連携し、一体となって取り組むべく村下教授は奔走します。その結果、青森県の32市町村、地元企業や大手企業がCOIに参加。企業の中には世界的な企業であるGE(ゼネラル・エレクトリック)も参画しました。

「GEの持っている最先端のノウハウで、岩木プロジェクトのビッグデータを

解析すると、ものすごく早いタイミングで病気の発症を予測できるかも知れません。早く予測できれば、早く予防もできるんです。これによって健康を取り戻すための画期的な仕組みが得られるかも知れないのです」と村下教授は期待を膨らませます。

こうした弘前大学の取り組みに魅力を感じて、GEの他にもイオン、花王やライオンなど幅広い業種の企業が参加し健康ビッグデータを活用しているのです。大学のみや企業のみを取組には限界があり、両者が組み合うことで大きなイノベーションの可能性が生まれるのだといえます。

イノベーションをいかに創造するか。地域を元気にするのも、日本を元気にするのも「イノベーション」というのが今の時代のキーワードになっているのです。

「COIというプロジェクトをベースに、弘前大学というフィールドのなかで、たくさんの異質な人同士が交じり合うことから、今、どんどん新しい画期的なアイデアなどが生まれています。地方の大学であるかも知れませんが、今まさに世界に冠たる弘前大学になりつつあるんです」

さらに村下教授は、この弘前の地から「寿命革命」という社会イノベーションを巻き起こし、健康長寿社会の実現をめざしているといいます。

弘前大学人文学部 教授
弘前大学社会連携推進機構 副機構長

森 樹男 教授

もり たつお



特集2

青森の魅力を高める中核人材の育成を！ 「めざせー！ じよっぱり起業家」

来年4月より人文社会科学部社会経営課程企業戦略コースが開設されます。そこでは森樹男教授が中心になり、サービス経営分野で活躍できる人材を育成していく教育プログラムが実施されます。名付けて「めざせー！じよっぱり起業家」。

東北地方の大学で唯一採択

サービス産業は日本のGDPの約7割を占め、その割合は拡大傾向にあります。このことから、今後の日本経済の持続的成長にはサービス産業の活性化や生産性向上が不可欠とされています。そのためには、サービス産業のイノベーションを担う次世代の経営人材やマネジメント人材の育成が必要になってきます。

こうした背景を踏まえ、経済産業省では、2015年度に「産学連携サービス経営人材育成事業」をスタートさせました。この事業は、サービス産業の専門的・実践的な教育プログラムを開発する大学を支援していくというもので、弘前大学は東北地方の大学の中で唯一採択されました。

弘前大学の事業名は「めざせー！じよ

っぱり起業家。青森の魅力を高める中核人材育成事業」で、「じよっぱり」とは津軽弁で強情っぱりという意味を持つ方言。「じよっぱり起業家」とは、青森県を愛し、青森県のモノにこだわり、それを国内外に発信するサービス関連事業をおこなう起業家のことを指した造語です。

弘前大学人文学部 社会経営課程 企業戦略コース
サービス経営人材育成にサレシス課程 企業戦略コースでは取り組めます!
地域の魅力を伝える旅行商品を開発する仕事に携わりたい!
ITを駆使して、青森県の県産品をもっと販売したい!
海外のお客様に青森県の魅力を知らせてもらい、青森県を誇って欲しい!
めもてなしの質をのびさせ、もっと多くのお客様に楽しんでもらいたい!
と考えている学生を支援します
めざせー！じよっぱり起業家。青森の魅力を高める中核人材育成事業
教育プログラム開始は平成28年度から!

サービス産業に関する

学術的・実践的な能力を学ぶ

「弘前大学人文学部では、これまでも学生たちが企業が抱える課題に対して提案をしたり、自分たちのアイデアを検証するための実践活動まで行うなど、地域企業と連携した課題解決型学習をおこなってきました。こうした地域連携授業が評価され、今回の国の事業に採択されたのだと思います」と話すのは、人文学部で経営学コースに所属している森樹男教授です。

弘前大学では来年の4月、人文学部が人文社会学部に変わり、社会経営課程企業戦略コースができます。ここでは、サービス経営人材育成の取り組みが行われます。

その内容は、地域の魅力を消費者に伝える機能をサービス機能と捉え、その機能を果たすために必要な知識や能力を学術的・実践的に学ぶ教育プログラムを

うな能力を習得するかというと、「夢を現実の目標に変換できる能力」「青森県の特徴や歴史を理解し、地域の魅力を発掘できる能力」「青森県の課題を理解し、その解決方法を具体的な事業計画として提示できる能力」「立案した事業計画を実現できる能力」を学びます。

生産者と消費者を結ぶ

役割を担う

青森県には優れた地域資源がたくさんあります。しかし、その魅力を消費者に伝えることができなければ、商品を購入してくれたり、青森県を訪れてくれることはありません。

そこで本プログラムでは、生産者と消費者を結ぶための企画を作り、実行していく力を持った人材を育てていく。地方創生という時代でもあり、地域で雇用を拡大する必要性にも迫られています。これからは自分で仕事を創り、雇用を生み出す人材が求められているのです。

一方で、サービス企業の生産性の向上も重要で、サービスに関して体系的に専門的・実践的な教育を行っていくことや、これまで勘や経験で作ってきたことを、データで数値化することによって見えるようにする能力などを身に付けていかなければなりません。

学生が育ち、

地域が育つプログラム

「めざせ！じよっぱり起業家」プログラムでは、「サービス企業経営に関わる専門知識の学習」「サービス企業と連携した実習」「サービス企業でのインターンシップによる就業体験」「青森県で暮らすための仕事づくり支援（起業家教育）」がその内容となっています。

「地域の魅力を伝える旅行商品を開発する仕事に携わりたい！」「ITを駆使して、青森県の農産品をもっと販売したい！」「おもてなしの質を向上させ、もっと多くの観光客に来てもらいたい！」「海外のお客様に青森県の魅力を知ってもらい、青森県を訪れて欲しい！」と考えている学生にとっては、ぜひ学んで欲

しいコースなのです。

「行政がカバーできない社会的なニーズをビジネスの手法で解決するような社会的起業があれば、サービス企業に就職して活躍する人もいると思います。その一方で家業を手伝いながら、別なビジネスをするという青森的な起業もあって良いのではと考えています。こうした人材を社会へどんどん輩出していくことが私たちの事業であり、使命だと思っています」

プログラムの目的のひとつとして、成果を青森県内の大学と共有し、県全体で「じよっぱり起業家」を育成する体制構築を目指しています。将来的に学生が育ち、地域が育っていくようなプログラムができれば、どんなに素晴らしいのでしょうか。



開発。地域を活性化するための人材育成事業（サービス産業起業家育成プログラム）と なっていただきます。どのよ



森 樹男教授（もり たつお）

1966年富山県高岡市生まれ。神戸商科大学大学院（現兵庫県立大学大学院）経営学研究科博士後期課程を経て弘前大学へ。博士（経営学）。2009年より現職。大学では文部科学省「GP「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」の実施責任者として地域企業と連携した課題解決型授業を実践。また、学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアム企画運営委員長、青森県津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議議長などを務める。専門は国際経営論、経営組織論。

サークル紹介



結成5年 学生、住民と交流深く

弘大囃子組

(ひろたいはやくみ)

迫力の響き 各地で

「囃子でみんなを笑顔に！」

「弘大囃子組」は、弘前大学の学生サークルです。「囃子でみんなを笑顔に！」をモットーに、ねぶた祭りなどのお囃子を練習し、そのお囃子を演奏披露したり、子どもたちに教える活動などを行っているサークルです。



結成は2009年。その年は、弘前城築城400年を記念し、市民企画の様々なイベントが実施され、その申し子としてこのサークルが誕生しました。

弘前市の夏の風物詩である「ねぶた祭り」は全国でも有名で、約90もの団体が出場する華やかな祭りですが、その一方で、町内会が主体の弘前ねぶたは、若い世代の担い手の減少によって維持が難しくなっている現状があります。それを愁いた市民が「横笛でギネスに挑戦！」と題し、弘前城公園に横笛の吹き手を集めて「ねぶた囃子」を同時演奏しようというイベントを計画、その結果、3,762名の横笛同時演奏を達成、ギネスブックに登録されました。

このイベントの本当の目的は、弘前市民に伝統文化への理解を深めてもらうこと、お囃子の継承者を増やすことでした。弘前大学は全面的に協力し、横笛講習会を何度も開催して、笛の理解と普及に努めました。多くの学生が演奏者としてまた運営者としてこのイベントに携わり、その年の弘前大学のねぶたのお囃子には、100名を超える学生が参加しました。

これらのイベントの終了後、イベントを牽引した「チーム弘前」と名付けた学生グループが、活動の終了解散を惜しみ、今後もお囃子の演奏・普及を続ける活動の場として、サークル「弘大囃子組」を作りました。最初は弘前のねぶただけしか演奏できませんでしたが、次第にレパートリーも増え、参加人数も増えていきます。

継承と伝播

サークル「弘大囃子組」の活動の特徴は、「継承と伝播」にあります。まず第一の活動は、自分たちの学びで、青森の民俗行事で演奏されるお囃子を練習し演奏できるようにすることです。

「ねぶた祭り」は、実は地域ごとになぶたもお囃子の曲も違います。学生たちは弘前ねぶたの他、青森、五所川原、黒石、木造など、近隣のねぶたを習得します。また「お山参詣」という、津軽一円の信仰の山である岩木山に参詣登山する時の「登山囃子」があります。こうした地域に伝わるお囃子を学び、演奏を楽しみます。お囃子の指導は、地域の皆様の暖かい支援で、地元のお囃子の方々にお願ひしています。弘大には全国から学生が集まります。弘大囃子組も、青森出身者ではない学生達がこのように青森の伝統文化を広く深く学ぶのです。



囃子で“わ”を広げよう

さてその次がさらに大事で、第二に、地域と一体になった「町作り」、またさらに若い世代への継承を担う活動をしています。その代表は、弘前市が学生の主体的活動を支援する「学都ひろさき」のプロジェクトで、弘大囃子組は、「囃子で“わ”を広げようプロジェクト」という名前で、学生が地域に出て様々な活動をします。年間約40箇所、施設やイベントに出かけます。例えば、小学生に自作の笛をプレゼントしてお囃子を教えたり、敬老会や高齢者施設、市のイベントに出かけて演奏を行います。子どもたちは、目の前で演奏を聞き大喜び。年の近い学生たちから笛を習い、地域の文化に自然と親しみます。また高齢者は、長年親しんだねぶたの音色に魅せられ、かつてはねぶたに出演していた人も多く、手拍子をしたり踊ったり、会場はぐっと若やぎどっと笑顔に包まれます。まさに「囃子の“わ”が広がるプロジェクトなのです。

「弘大囃子組」の学生たちは、市民からのあたたかい声援を受けて、元気に活動しています。地域の皆様と学生の「やさしい思い」が一体になった、そんなサークルです。

青森県教育委員会との連携協定

弘前大学は、青森県教育委員会との間において、社会の変化や多様化に対応できる幅広い視野と総合的な判断力を持ち、地域のニーズに応じた人材を育成するとともに、青森県の学校及び地域における教育の充実・発展に寄与することを目的に、相互の密接な連携・協力する協定を平成27年2月24日(火)に締結しました。

本連携協定により、今後は教職大学院の設置による学校教育活動を牽引する若手教員の育成及び学校運営の中核となるミドルリーダーの育成、また、高大連携事業として、弘前大学教員の高等学校への派遣による、高校生のキャリア形成等新たな事業の展開に期待が寄せられています。



協定締結の様子

青森県教育委員会と国立大学法人
連携に関する協定締結式

平成26年度弘前大学学術特別賞授与式

平成27年2月27日(金)、平成26年度弘前大学学術特別賞授与式が執り行われました。

弘前大学学術特別賞は、独創的かつ完成度の高い数編の論文を対象とする「弘前大学学術特別賞(遠藤賞)」と、独創的かつ著者の将来性を伺わせるに足る1編の論文を対象とした「弘前大学若手優秀論文賞」があり、弘前大学の研究水準の向上に著しい貢献をした論文を顕彰することにより、研究水準の一層の向上を図ることを目的として平成23年度に創設されたものです。

今年度は、学術特別賞(遠藤賞)1名、若手優秀論文賞2名の受賞があり、佐藤学長から、世界に誇る研究成果を挙げられたことへの謝辞とともに、表彰状と盾などが贈られ、受賞論文は弘前大学を代表する研究成果であり、この受賞をきっかけとして、さらなる研鑽を期待する旨挨拶がありました。

続いて、来賓の遠藤前学長からの挨拶後、各受賞者よりスピーチがあり、遠藤賞を受賞した医学研究科伊藤悦朗教授からは、研究を支援いただいた方々に対する謝辞と、この受賞を機にダウン症に合併した白血病の仕組みの解明を進め、白血病の治療や予防に寄与するよう研究のさらなる発展を目指したい旨挨拶がありました。授与式には役員等多数の出席者があり、大変盛大な式典となりました。



表彰状を授与される伊藤教授

黒石市・平川市・藤崎町・大鰐町・田舎館村教育委員会との連携協定締結

弘前大学教育学部及び大学院医学研究科は、黒石市・平川市・藤崎町・大鰐町・田舎館村教育委員会との間において、我が国における教育政策の大きな変化に伴う課題、そして青森県基本計画「未来を変える挑戦」に謳う未来の青森県づくりの基盤となる人材の育成、学校教育の充実、教員の資質・能力の向上などの課題に教育委員会と弘前大学双方が、手と手を取り合って取組み、さらに充実発展させることを目的に、相互の密接な連携・協力する協定を、平成27年3月25日(水)に締結しました。

本連携協定により、今後は、未来に生きる子どもたちが健やかに、そして逞しく生き抜いていくように、また、地域の教育力の向上と地域の教育活動の活性化のため、新たな事業の展開に期待が寄せられています。



協定締結の様子



黒石市・平川市・藤崎町・大鰐町・田舎館村教育委員会と国立大学法人
弘前大学教育学部・大学院医学研究科との連携に関する協定締結式

「附属図書館ラウンジトーク」で佐藤学長がトーク

平成27年4月22日(水)、「第1回附属図書館ラウンジトーク」を附属図書館2階アクティブ・ラーニング・エリアで開催し、学生、教職員、一般市民ら約80名が参加しました。

このラウンジトークは本学の教職員、学生等を講師とし、附属図書館を利用する学生、教職員、一般市民を対象に弘前大学や青森のことをもっと知ってもらおう、教員の研究を知ってもらおうと今年度から企画したイベントであり、昨年10月、改修工事に伴い整備したラーニング・ commonsの活性化のために開催したものです。

第1回目は佐藤敬学長をお迎えして、「学長を知る」をテーマに郡千寿子附属図書館長がインタビューする対談形式で行いました。佐藤学長は、インタビューの中で、医学部学生時代、ラグビーに打ち込んで常に仲間と切磋琢磨したことや休日の過ごし方について話されました。

このラウンジトークは祝日を除く毎週水曜日に開催し、第2回目以降は、附属図書館職員による「図書館を知る」、加藤健理事・副学長による「副学長を知る」、教育学部教員による「研究を知る」などが行われました。



佐藤学長(左)と郡附属図書館長(右)

楽天野球団社長による特別講演会「日本一愛される球団を目指して」を開催

全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を一層推進し、地域の再生・活性化の拠点となる大学を形成するため、株式会社楽天野球団社長による特別講演会「日本一愛される球団を目指して」を、平成27年5月7日(木)に弘前大学創立50周年記念会館みちのくホールで開催しました。

この特別講演会は、東北地方においてプロ野球球団を始め様々な事業を展開している株式会社楽天野球団と連携し、同野球団の地域(東北)を志向した事業の展開や、地方企業としてのノウハウを本学学生及び教職員に地域志向的意識を啓発する事を目的として開催されました。

講演者の立花陽三社長からは、時折、質問形式や東北楽天ゴールデンイーグルスの現状についての話を交えながら、「東北のつけん活動」、「TOHOKU SMILE PROJECT」及び、学生による学生のための動員企画「楽天イーグルスキャンパスアンバサダー」等の事業が紹介されました。



熱心に講演を聞く学生達



講演する立花球団社長

深浦町との包括連携協定を締結

平成27年5月15日(金)に相互の密接な連携と協力により、地域の課題に迅速かつ適切に対応し、活力ある個性豊かな地域社会の形成と発展に寄与することを目的として、深浦町との包括的な協定を締結しました。

調印にあたって、吉田深浦町長から、平成26年度に策定した第2次総合計画の重点プロジェクトである①定住促進②1次産業と観光業の結合③地域医療・地域包括ケアの促進・充実に向けた協力体制の構築について協定締結を機に、弘前大学と深浦町相互の発展を目指したいとの挨拶と、佐藤弘前大学学長から、協定締結を機に、本学所有のセミナーハウスや臨海実験所及び、重点研究フィールドでもある白神山地区が深浦町にあり、町全体をエリアキャンパスと位置付け、地域人材育成、学術研究の場の拡大を検討し、青森型地方創生のさきがけのお手伝いをしたいとの挨拶がありました。



協定書を手にする吉田深浦町長と佐藤弘前大学学長及び各関係者

作家 高橋克彦氏講演会 「北の炎(ほむら)」を開催

文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学CO-C事業)」に採択されたことを受け、青森県の地域課題の克服や、「青森ブランド」の価値の創造に向けた様々な取組を進めています。その一環として、平成27年5月22日(金)に、作家の高橋克彦氏をお招きし、本学学生・教職員に青森県を含めた東北地域の歴史や文化をよりいっそう学んでもらうことを目的とした特別講演会を弘前大学創立50周年記念会館みちのくホールで開催しました。

講師の高橋克彦氏から、日本の古代神話についての話を交えながら、津軽地域の地名の由来や地域の人々が持つ「和」を大切にしている心が、東日本大震災の際に万人平等の姿勢に現れ、外国から賞賛されたこと等について紹介されました。当日は、佐藤学長をはじめ、教職員や学生など合わせて約280名が出席し、満員の会場では、当初予定していた時間をオーバーして、盛況のうちに終了しました。講演後には学生や教職員から、高橋克彦氏の講演を聴くことができ大変貴重な機会を得ることができたとの声や、もう一度講演会を開催してほしいとの要望が寄せられました。



講演する高橋克彦氏



弘前大学資料館にて貴重資料の説明を受ける高橋克彦氏(右)

平成27年度 弘前大学学生ボランティア活動助成団体採択書 交付式を実施

学内外でボランティア活動を実施している本学課外活動団体への活動助成費採択書交付式を平成27年6月17日(水)に事務局2階特別会議室で行いました。

交付式では、学長から今年度申請のあった8団体の各代表者1人ひとりに、活動助成費採択書が手渡されました。

佐藤学長から、「皆さんが日頃、弘前大学を代表してボランティア活動に携わっていることを讃えるときにも感謝している。活動をしていくうえで、予想外の場面に遭遇することもあるでしょう。このように多様な経験の積み重ねをとおして更なる発展を期待している。今後もボランティア活動させてもらえるという感謝の気持ちを忘れないように、活躍してください。」と学生の今後の活動に対する期待を祈念する言葉が贈られました。



佐藤学長(中央)、伊藤教育担当理事(右)、伊藤学務部長(左)と学生ら

団体名	申請代表者名
児童文化研究部 KIDS	石塚 亮 太 (農学生命科学部)
僻地教育研究会	北 上 知 奈 里 (理工学部)
さくらボランティア	葛 西 築 (教育学部)
ひまわりサークル	佐藤 徳 子 (医学部保健学科)
環境サークルわどわ	高田 将 司 々 (理工学部)
teens&law	アダブテッドスポーツサークル爽~so~
キャリアサポート研究会	寺 嶋 あ さ 美 弓 (教育学部)
	海老名 晶

藤崎町との包括連携協定を 締結

平成27年6月12日(金)に相互の密接な連携と協力により、地域の課題に迅速かつ適切に対応し、活力ある個性豊かな地域社会の形成と発展に寄与することを目的として、藤崎町との包括的な協定を締結しました。

調印にあたって、平田藤崎町長から、「弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター・藤崎農場が昭和38年に開設され、長年にわたり農業をはじめ医療、教育などの分野で本学と関わってきた歴史を述べられ、協定締結を機に、学術・研究など、より広範な分野で連携することにより、町の活性化に向けての指導、尽力を期待したい」との挨拶がありました。佐藤弘前大学学長からは、「以前より協定締結を機に、教育・研究などについて、更なる本学と藤崎町との共同作業が発展するよう期待したい」との挨拶がありました。



協定書を手にする平田藤崎町長と佐藤弘前大学学長及び各関係者

むつ市との包括連携協定を 締結

平成27年7月7日(火)に相互の密接な連携と協力により、地域の課題に迅速かつ適切に対応し、活力ある個性豊かな地域社会の形成と発展に寄与することを目的として、むつ市との包括的な協定を締結しました。

調印にあたって、宮下むつ市長から、「高等教育機関が無いむつ市を含む下北地域にとって弘前大学との連携は教育面での大きな基盤となる。教員や学生が行き交い、若者がいる活気のある街づくりを目指している。また、地域資源の掘り起こしと活用に向けた調査研究など、互いの強みを活かして様々な分野で連携をし、ゆくゆくは高等教育機関の設置などにつながれば」との挨拶がありました。引き続き、佐藤弘前大学長から、「今回の協定締結を機に、更なる地域活性化に向けて連携を深め、地域貢献に向けた取組が強化されることを期待したい」との挨拶がありました。



協定書を手にする宮下むつ市長と佐藤弘前大学長及び各関係者

第6回弘前大学出版会賞 表彰式を挙

弘前大学出版会では、平成24年1月から平成26年12月までに同出版会から刊行された32作品の中から、優れた作品を選考会議において選定し、「第6回弘前大学出版会賞」として表彰を行いました。受賞作品には、教育学部准教授の高瀬雅弘編著『弘大ブックレットNo.12山田野―陸軍演習場・演習廠舎と跡地の100年―』が選ばれました。本書は、弘前大学関係者2名と地域で活躍する研究者2名の著者が、歴史学・考古学・社会学の視点から地域で聞き取り調査を行い、地域に刻まれた人々の記憶をまとめ上げたものです。授業の中から始まった地域調査は、本書の発行がきっかけとなり現在も様々な情報が寄せられ、調査を継続して進めており、研究のさらなる発展が期待されています。



表彰式列席者による記念撮影



表彰式の様子

農学生命科学部創立60周年 記念式典を挙

弘前大学農学生命科学部では、去る7月4日(土)に弘前大学創立50周年記念会館みちのくホールにおいて、農学生命科学部創立60周年記念式典を、県内外の卒業生、元教職員をはじめ、学内外の関係者約100名を招き盛大に開催しました。

記念式典では、佐々木長市農学生命科学部長が、「新しい学部の発足を間近に控え、地域の中核大学の農学生命科学部として、一層の地域貢献に邁進し、地域とともに発展できる学部となる」と式辞を述べました。

記念講演では、農学生命科学部の卒業生でもある、弘前市都市環境部公園緑地課樹木医小林勝氏が、「弘前公園の桜はなぜ・なのか」と題し、題目の「・」に入る言葉を予想させるクイズを出題するなど趣向を凝らした講演を行い、聴衆は弘前公園の桜に関する歴史や管理方法について理解を深めました。



式辞を述べる佐々木学部長



祝辞を述べる三村知事

平成27年度ヘルシーエイジング・イノベーションフォーラム(東京)開催

平成27年7月3日(金)、一橋講堂(学術総合センター2階)において「超高齢化社会の未来を考えるヘルシーエイジング・イノベーションフォーラム『寿命革命』」健やかに老いる未来社会の実現に向けて今何をすべきか?」を開催(全国各地から約600名参加)しました。



聴講する参加者



基調講演・中路研究リーダー

本フォーラムは、文部科学省の「革新的イノベーション創出プログラム(CO-STREAM)」に採択された、本学と企業及び自治体等で組織する「認知症・生活習慣病研究とビッグデータ解析の融合による画期的な疾患予兆発見の仕組み構築と予防法の開発(略称:革新的「健やか力」創造拠点)」をテーマとした研究拠点の活動を推進するにあたり、産学官金の関係者が一堂に会し、これまでの研究成果の発表や新たな産業創出のあり方などについて討論する場として開催したものです。

今後とも本拠点では研究成果を継続的に報告するとともに、真のソーシャル・イノベーションを巻き起こすべく社会実装へ向けた取り組みを続けてまいります。

弘前大学「教育に関する表彰式」を実施

去る8月7日(金)、「教育に関して優れた業績を上げた教員」の表彰式を、弘前大学附属図書館2階グループラウンジグループにおいて、引き続き「優秀な成績を修めた学生」の表彰式を、同3階グループラウンジグループにおいて行いました。

表彰式には、各学部等から推薦された教員6名中5名、学生26名中22名が出席し、伊藤教育担当理事・副学長をはじめ各学部長・研究科長が見守る中、佐藤学長から一人ひとりに表彰状と副賞が贈呈されました。

また、学長から祝辞とともに今後の活躍を期待する旨の励ましの言葉があり、これを受けて、教員を代表して医学研究科の中澤満教授から、学生を代表して人文学部3年の橋本拓也さんから謝辞とこれからの飛躍を誓う決意が述べられました。



佐藤学長(前列左から4人目)と表彰教員



佐藤学長(前列左から5人目)と表彰学生

平成27年度 弘前大学成績優秀学生の被表彰者一覧

[学部学生]

所属学部・学科等	学年	氏名
人文学部 経済経営課程	2年	阿部 夏子
人文学部 経済経営課程	3年	橋本 拓也
人文学部 経済経営課程	4年	谷尾 詩織
教育学部 生涯教育課程	2年	赤平 江莉香
教育学部 養護教諭養成課程	3年	新山 千里
教育学部 学校教育教員養成課程	4年	大黒 樞
医学部 医学科	2年	並木 沙奈実
医学部 医学科	3年	河合 由璃
医学部 医学科	4年	山崎 瞬
医学部 医学科	5年	奥瀬 諒
医学部 医学科	6年	大原 万里恵
医学部保健学科 理学療法専攻	2年	加川 千晴
医学部保健学科 作業療法専攻	3年	榊 恭平
医学部保健学科 看護学専攻	4年	柴田 唯衣
理工学部 電子情報工学科	2年	佐々木 浩二
理工学部 地球環境学科	3年	上林 真菜
理工学部 物理科学科	4年	鳴海 諒洸
農学生命科学部 生物学科	2年	川口 愛翔
農学生命科学部 生物学科	3年	今井 千尋
農学生命科学部 生物学科	4年	塚本 誠太

◎人文3名、教育3名、医学科5名、保健学科3名、理工3名、農生3名、計20名

[大学院学生]

所属研究科・専攻等	学年	氏名
人文社会科学研究科 応用社会科学専攻	2年	山本 昌持
教育学研究科 養護教育専攻	2年	田中 亜紀
医学研究科 医科学専攻	2年	明本 由衣
保健学研究科 保健学専攻	2年	佐藤 拓弥
理工学研究科 理工学専攻	2年	奥山 和貴
農学生命科学研究科 農学生命科学専攻	2年	平久江 歩美

◎人文1名、教育1名、医学1名、保健1名、理工1名、農生1名、計6名

平成27年度 弘前大学における教育に関して優れた業績を上げた教員の被表彰者一覧

[学部長・研究科長推薦] (実施要項3-1より)

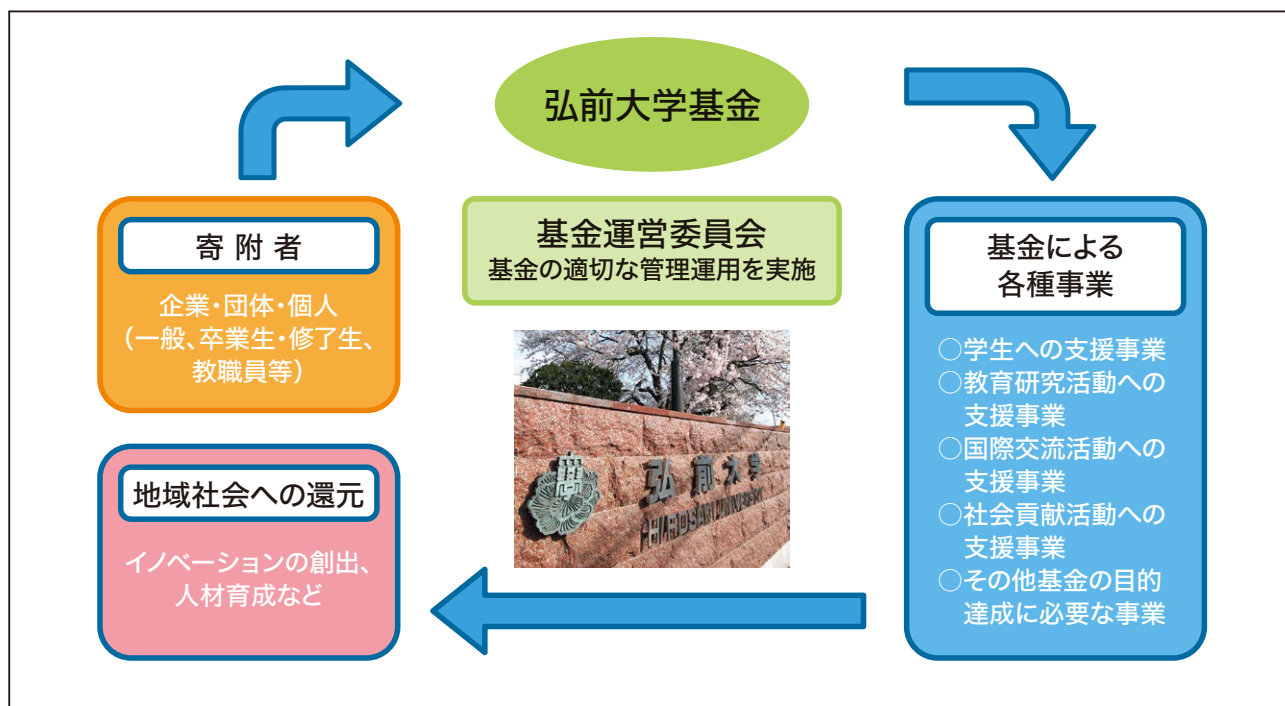
所属学部・研究科等	職名	氏名
人文学部	教授	山田 巖子
教育学部	教授	RAUSCH ANTHONY SCOTT
医学研究科	教授	中澤 満
保健学研究科	教授	敦賀 英知
理工学研究科	教授	髙西 真寿
農学生命科学部	准教授	前田 智雄

[学内共同教育研究施設長・医学部附属病院院長等推薦] (実施要項3-2より)

所属学部・研究科等	職名	氏名
推薦者なし		

「弘前大学基金」へのご協力をお願い申し上げます。

「弘前大学基金」は、本学の財政基盤の充実強化を図り、学生支援、教育研究活動等の一層の充実を図ることを目的に、本年7月に創設いたしました。この基金を有効に活用し、地域を志向した大学改革を進め、地域活性化の中核的拠点としての本学の姿を確固たるものとし、イノベーション創出と人材育成を通じて地域社会に還元して参ります。本基金の趣旨に何卒ご理解とご賛同をいただき、経済状況が厳しい中ではございますが、格別のご支援・ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



【税制上の優遇措置】

本学へのご寄附につきましては、税制上の優遇措置が受けられます。

〈個人からのご寄附〉

所得税 〈所得税法 第78条第2項第2号〉

寄附金額が2千円を超えた場合は、確定申告することにより、総所得金額の40%を限度として所得の控除が受けられます。

・寄附金控除額＝寄附金額(総所得金額の40%を限度)－2千円

住民税 寄附者がお住まいの都道府県・市区町村が、条例で本学を寄附金税額控除の対象として指定している場合、寄附金額(総所得金額の30%を限度)－2千円に次の率を乗じた額が税額控除されます。

・お住まいの都道府県が指定した寄附金…4%

・お住まいの市区町村が指定した寄附金…6%

〈法人からのご寄附〉

法人税 〈法人税法 第37条第3項第2号〉

寄附金の全額が損金に算入され、税金はかかりません。

(一般の寄附金にかかる損金算入限度額とは別枠です。)

〈お問い合わせ先〉 弘前大学基金事務局(財務部財務企画課内)
〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地
TEL 0172-39-3034 FAX 0172-32-9490
E-mail jm3034@hirosaki-u.ac.jp

ひろだい 025

2015年9月発行

弘前大学総務部広報・国際課

「ひろだい」はWebでもご覧いただけます。
下記URLからお進みください。

<http://www.hirosaki-u.ac.jp>



弘前大学

〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地
Tel.0172-39-3012 Fax.0172-39-3498
E-mail : jm3012@hirosaki-u.ac.jp